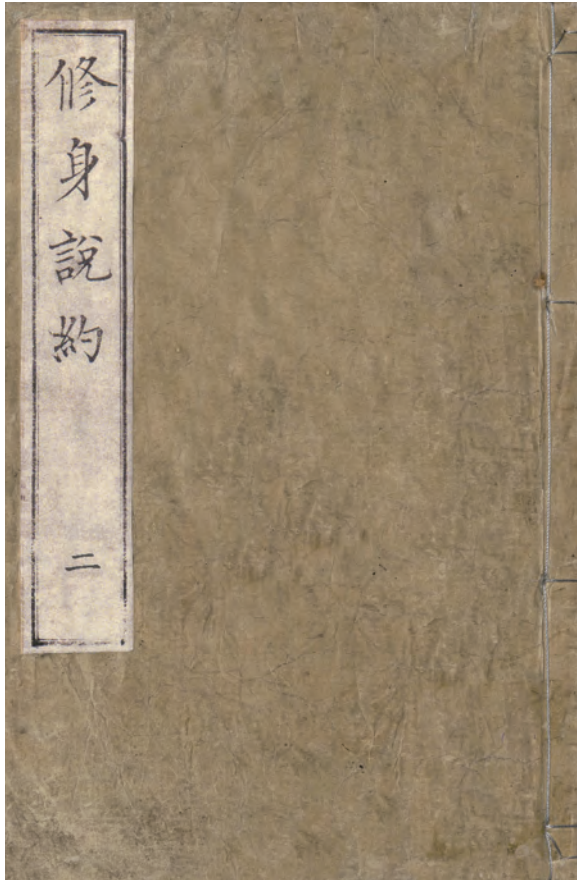


修身説約 卷ノ二

復刊版



群馬地域文化振興会

修身說約卷の二

木戸麟編纂

第一

萬吉ハ伊勢の國鈴鹿峠の人ホシテ、父
を市右衛門といひ、母を久米といふ市
右衛門家まづけきば、法ねよ、人よ傭
役せり、一日、旅客の行李を擔ひ、途中ホ
テ、卒よ倒き死せり、市右衛門二兒あり、

長子ハ、即萬吉不_レて、時_ニ四歳_ニあり、次子
を吉次といふ、こ_レもま_レ、幾_バくなら
ば、死せ_レ、父米か_レく、節操をま_レ
りて寡居_ル、紡績_ニ織_ニを業_トして、萬吉
を鞠養_セ、ま_レと、夫を喪_ヒ、兒を亡_ヒ
し_レ、憂鬱_シて病_ヒを成_シ、時々_ニ發作
せ_レ、萬吉を比_カか_レま_レを、は_レま_レど、肩
を摩_テ、腹を按_シ、晝夜_ニ心_ヲ残_クして看

護し、病ひ間あきば、街道よいで、旅人の包みえの又も手槍などを負擔し、鈴鹿峠を昇降して、わだり、此錢を得、母の欲をもえのを買い、或も藥餌を沽ひ求む、人みか之に感して、恤まざるえの形あり、此とき、萬吉六歳なり、此年饑饉打つて、途に餓草おほらるる、萬吉とて、萬吉母子に、凍餓せざる

とぞ、天明三年癸卯仲秋、幕府の臣石川
忠房といふ人、大坂城を發して東に歸
りけるが、水口驛より轎をくだり、僚友
と上山驛を履て、鈴鹿嶺にかゝり、
お六七歳の兒童、垢衣を法着、敝履をう
かち、燃紙條に數錢を貫きて携へ、忠房
等を見て、路傍に避はくさるが、一人は
は戲きて曰もく、汝錫を買えんとは